

福島県立ふたば未来学園高等学校



令和元年 7 月 3 日 (水)

おもて

情報量の格差を埋めるには？



- ・ 専門家と一般住民の廃炉に関する知識や情報量に差がある。
- 差を埋めることで専門家の信頼性を高め、住民は安心感を得る。
- 専門家と住民の一体感が増し、廃炉に対する全体意識が向上する。
- ・ 情報が与えられることによって、興味・関心も薄れ、分からない状態の悪循環が生まれる。

うら

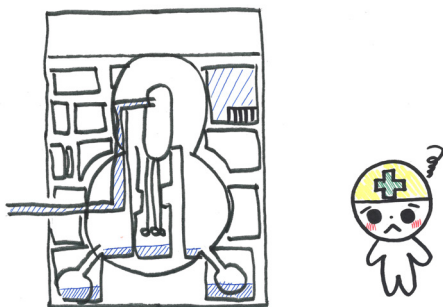
専門家と地域住民 または 住民同士の情報量を等しくする手段は？

紙媒体(パンフレット, 広報紙など), ラジオ, インターネットなどを通して住民に情報を発信し, それを受けた住民が交流し, 意見を交換し合うことができる場を設ける。
全ての世代の住民に平等に伝達されるよう, メディアの特性を活かした発信を行う。
誰が見ても分かりやすいように, イメージ図を活用したサイトやパンフレットを作成する。

- ・ 情報量の差を埋め, 不信感を払拭させる。
- ・ 専門家と住民の相互理解により, 廃炉を地域に密着させる。

おもて

廃炉作業って安全？



毎日行われている廃炉作業。
当然のように行われていることだが果たして安全なのか。そもそも住民や作業員たちには害がないのか。

うら

廃炉作業を行うということ は安全なのか？ また、住民や作業員への 影響は？

- A 住民・作業員に健康被害は特にない。
ただし、作業中に事故が起きるリスクがある。そのためにロボットを活用する。廃炉作業の方法を工夫するといったリスクを減らす必要がある。
- 結論 安全とはいえない。
(安全に行うようにしている。)

おもて

~もっと早く安全に廃炉
出来ないのか~



- ・廃炉の規模や大変さはよく分らないけど、できるのが30~40年と聞いて、もうちょっと早く出来ないか。
- ・自分達が大人になってからも影響が出るんじゃないか。

うら

急いで作業することによって安全性が低くなり、何らかのアクシデントによって余計に時間がかかるのではないか。

未知の作業に向けての準備、研究で時間がかかる。外部との協力(ロボット開発など)で安全性、確実性が増す。汚染水はリスクのせめぎ合い(作業の危険性・時間経過の危険性)

住民への情報の発信、外部との協力が大切。

(無時間をかけただけの理由(準備、リスク)がある。これと考えると安全かつ迅速な作業は難しい)

おもて

廃炉はいつ終わるのか

廃炉と聞いて
私達のイメージは...

- 何やっているか分からない
- 難しそう
- 作業員、どうやって雇われているの?
- どんな人が働いているの?
- 専門用語が多すぎて分からない

↓
出た疑問は...

- ほんとに30~40年で終わるのか
- 何をしたら廃炉作業が終わるのか
- 作業員の人はどのような気持ちで働いているのか



うら

廃炉に終わりはあるのか?

廃炉の終わりとは...

廃炉作業は30~40年かかっている

大きく分けて3つ

① 燃料とり出し

- ・ガリ抜き・燃料取り出し設備の設置
- ・燃料とり出し・保管/搬出

② 燃料デブリ取り出し

- ・状況把握/取り出し工法の検討
- ・燃料デブリ取り出し・保管/搬出

③ 原子炉施設の解体等

- ・シナリオ/技術の検討
- ・設備の設計/製作・解体等

廃炉の具体的な終わりはわからないが、地元住民が納得する選択をとりながら廃炉作業を行う。例えば、解体して終わるだけでなく、地域の活性化することが廃炉の終わりだと思えている。

